

# 共鳴する心と心。 「発生現場」

森 恵

私には、常々思っていることがある。誰もが欲しい情報を簡単に手に入れられる環境、それぞれの個性が尊重される多様性の時代。そんな中であって、人は興味があるものや関心があることを求めて出掛けて行く。アクセス、ロケーションなどはものともせず、心のままに行動するものだと。かつては、都市部、中心部に吸引力、集客力があつた。でも、今は、そこで得られるもの、そこで出会えること、妥協のない自分自身の心の欲求を満たすために人は動くものだと思っている。

佐賀大学は、美術館がある全国でも有数の大学。佐賀大学美術館は、教育・研究の場であるとともに地域・社会に開かれた場という役割も担っている。また、建物の意匠も素晴らしく、ランドマークにもなりうる理想的な施設だ。私も何度か足を運び、いつも胸をときめかせながらスケジュールをチェックしている。

そして、今、佐賀大学美術館で行われている「発生現場」。これは、2016年にスタートした、現代における芸術表現および芸術の新しい楽しみ方を紹介するというコンセプトのイベント。今回は、新たな試みとして、4名のゲストアーティストによる現代アートの展示にチャレンジしている。会場には、展覧会にありがちな説明が書かれたパネルはない、作品のキャプションもない。自分の思いのままに鑑賞することができる、4名のゲストアーティストの世界が広がっている。

受付を入ってすぐのスペースでは、鈴木淳さんの作品がにぎやかに迎えてくれる。多彩な絵柄の有田焼のそば猪口のコレクション、床に向かって震え続ける扇風機、発電する行為とは真逆の行為を可視化した模型、まっすぐに貼られた付箋…。私たちが生きる社会への問題提起が独特の表現で展開されている。鈴木さんは高校で生物の先生もしているとのこと。一見、生物とは全く無縁のように感じられるが、生物の営みという部分でつながっているという解釈もできそうだ。人という生物の性質へのアイロニーを表現しているようにも思われる。

鈴木作品の向かい側の壁を埋め尽くすのは、強烈なインパクトの社会的メッセージ。韓国から参加のチェ・ヨンファンさんのほとぼしるエネルギーに、思わず圧倒される。写真、手描き文字、映像が結合するコラージュは、爆発的な威力を放つ。類似した歴史を持つ日本、韓国、中国の過去の場面、そして今日の香港の奮闘における人々の図像が組み合わせられて、戦うことの意味を問い掛けている。それは、平和ボケの私たち日本人が忘れかけている感情を呼び覚ましてくれるかのようだ。もしかして、今を生きる私たちは、闘志を、正義感を、どこかに置き忘れてきたのかもしれないと考えさせられる。

美術館の中央部分、四方を壁で囲われたスペースの壁には福田篤夫さんの作品。「嗜好性という言葉があるように、それぞれの地域、環境、年代に培われた文化や技術があるべき」という考えを具現化するかのよう、古くからの日本の素材で創られたモチーフが規則的に張り巡らされている。光の入り具合で表情を変える、色や輝きが変化するということにも着目してみたい。さらに、「作品とはわからない

からおもしろい、解説をすることは概念の押し売りになるのではないか」と語る福田さん。見る者が、アートを通して人間としての本質に問われ、人間力を試されているかのように感じられる。

コーナーがガラス張りの開放的なスペースには、上村卓大さんのポップで精緻な作品群。自身のお子さん達が遊びの中から生み出したものをアートに昇華させていく、偶然の中から生まれたおもしろみを表現していく柔軟な発想は、とても愉快だ。そこにあるものをおもしろがる、すぐそばにあるものから発見することで、日々が、人生が豊かになると教えてくれる。暮らしの中の瞬間、瞬間に、アートを見出す、モダンで洗練された感性がとても心地いい。

それぞれのアーティストの作品から発せられるメッセージは、日常を映し出している。ここで繰り広げられているのは、日常からつながる非日常。非日常には自由が満ちあふれている。どう見ても、どう感じても、どう思っても、どう考えても、それは1人ひとりの自由。全くわからないのも自由、不思議なのも自由、怒りを抱くのも自由。お仕着せでないアートは、心を解放させてくれる。自分自身のうちにある未知を見つめることを叶えてくれるように思う。そして、目に見える部分のずーっと奥深く、心の奥深いところにある潜在的な部分、ピュアな核となる部分で共感できることに、人は引き寄せられるのだと再認識させてくれる。

現代アートが語りかけてくる小宇宙、「発生の場」。今回の佐賀大学美術館での「発生の場」は、佐賀を誇れるセンセーショナルな出来事に違いない。バルーンだけじゃない、大隈重信だけじゃない、佐賀をアートで魅力的なまちへと導いていける、大きな一歩になったのではないかと思う。佐賀大学美術館をめざして、色々なところから多くの人々が押し寄せる。そんな日が近づいていると願いたい。